

世界史的視点 研究深化を

皇帝の居城と教区教会を配し、世俗の権力と宗教的な権力を合わせた中心性を持つていたドイツのティレダ城。そして外郭には商職人が集まって都市機能を備えました。

こうした海外の事例と比較して考えると、鳥海柵も単に堀で囲って守りを固めていたという理解でよいかという新たな課題が見えてきます。鳥海柵では城館に接してさまざまな職人がいたことが発掘から明らかになっています。まさにヨーロッパの皇帝の城で起きたのと同じ現象が日本の鳥海柵で起きていたのです。

古代的な世界から中世的な世界へ転換していく具体的な変化の一つが、城を中心とした城下町的な都市形成と位置付けられます。そうすると鳥海柵は、日本の古代から中世への転換を物語る重要な遺跡という評価を超えて、世界史の中の普遍性を持つ遺跡とあらためて評価できます。

ティレダは今、主要な遺構の立体復元が計画的に進められています。一方で、歴史的な空間を復元するだけでなく、遺跡が傷まないよう、臨時のテントを立ててイベントを行うなど、地域が一体になって文化財と歴史を生かした取り組みも続いています。

11世紀の安倍氏による鳥海柵は、地形、川や人為的に掘った堀、柵や櫓などによって、防備を固めた当時の最先端の城と位置付けられます。さらに単に軍事的な砦・柵だったのではなく、都市的な機能を城館が持つようになっている中世的な都市形成の萌芽として、極めて大きな意味をもっていました。

それはヨーロッパの城の変化と比較していくことで、世界の歴史に位置づけて評価できます。今後は、そうした研究も大切になると思います。鳥海柵を世界史的な視点で捉えて、金ヶ崎町から世界に情報を発信していくことを考えるとわくわくします。

ヨーロッパの事例のように、効果的・集中的に立体復元していくことが必要です。単に建物だけ造るのではなく、歴史を生かしたイベントなど、未来の鳥海柵は、訪ねて楽しい魅力的な場所にきつとなります。

◆ ◆ ◆
今回で千田嘉博教授による講演「前九年合戦と鳥海柵」の要旨掲載を終了します。次回から、パネルディスカッション「前九年合戦時期の中心的建物を考える！」の内容を連載で紹介します。

古代世界から中世的世界へ、封建権力がどのように地域の公権力になり得たか。そして、その中で地域の中心地機能や宗教圏編成はどう変わったのか、世界史的な視点から鳥海柵を考えていく必要があると思います。

千田 嘉博氏 (奈良大学教授)

「前九年合戦と鳥海柵」 VIII

講演 千田 嘉博氏 (奈良大学教授)

金ヶ崎の国指定史跡 鳥海柵跡

8

考察 全盛期の中心的建物

2017年度 シンポジウムより



世界史の中でも普遍性をもつ遺跡であると評価する千田嘉博・奈良大学教授

千田 嘉博(せんだ・よしひろ) 奈良大学文学部文化財学科教授。1963年、愛知県生まれ。奈良大学文学部文化財学科を卒業後、名古屋市見晴台考古資料館学芸員、国立歴史民俗博物館助教授を経て現職。